



齒と口腔病

齒科醫學士五味芳春先生述

始





60-511



大正  
8. 4. 29  
内交



## 凡 例

一、本書は齒科竝に口中諸病の主なるものに就て五味齒科醫學士に就て、其の原因、症候、豫防法、療法等の一般を素人に分り易く之れを編せるものである。齒科及び口腔病は本書掲載以外に尙ほ少なからずあるも、其等は専門家でさへも稀れに見る位の稀有のものであるから之を除外し、も多くありふれたるものに就てのみ之を記載せるものである。

一、齒またよは、ひと唱へて、齒の健否如何は常に吾人の健康に影響あるのみならず、其の壽命にさへも關係するところあるものである。殊に文明の進むと共に齒の弱くなりつゝある今日、特に齒の健康に就て注意を拂ふの必要あるを以て、本書に於ては特に齒の衛生に力を盡して之を説明せるのである。



一、本書編纂の體裁、並に行文上の責任は皆編者に存するものである。

大正己未歲二月中旬

編纂者謹識

## 目次

第一章 齒の解剖と生理	一																		
齒の状態	齒の分類	齒の解剖	齒の發生	齒の生理	齒は段々悪くなる														
齒の病的變化	齒と健康との關係																		
第二章 齒の衛生	一三																		
齒牙發生時の注意	乳齒の衛生	發齒時の異常	小兒の食物	永久齒發生時の注意	健康診斷を受けよ	齒磨粉の選擇	齒を白くする水	優良なる齒磨の製法	齒磨粉	練齒磨	齒磨石鹼	齒磨揚子の選び方	揚子の使い方	妻揚子と其用ひ方	エロージョンと齒耗症	齒牙の清潔	齒の攝生	齒石を除去せよ	綠齒石の害
第三章 反齒	三六																		
生齒前の原因	生えた後の原因	障害	豫防法	矯正の注意	矯正に適當														



なる年齢||矯正法

第四章 齶齒……………四三

症候||原因||豫防法||療法||齒科無痛療法||痛を感ずる場合||局處麻醉法

第五章 乳齒の難生……………五一

原因||症候||療法

第六章 智齒難生……………五一

原因||症候||療法

第七章 過剩齒……………五四

原因||症候||療法

第八章 屈曲齒……………五五

原因||症候||療法

第九章 磨耗齒……………五五

原因||症候||療法

第十章 畸形齒……………五六

原因||症候||療法

第十一章 癒合齒……………五七

原因||症候||療法

第十二章 齒垢……………五八

原因||症候||療法

第十三章 齒石……………五九

原因||症候||療法

第十四章 齒牙折傷……………六〇

原因||症候||療法

第十五章 齒冠吸收……………六三

原因||症候||療法

第十六章 先天性齒牙缺如……………六三



原因    症候    療法	
第十七章 外傷性齒髓炎	六三
原因    症候    療法	
第十八章 單純性慢性齒髓炎	六四
原因    症候    療法	
第十九章 單純性慢性齒髓炎	六六
原因    症候    療法	
第二十章 象牙質知覺過敏症	六七
原因    症候    療法	
第二十一章 慢性化膿性齒髓炎	六九
原因    症候    療法	
第二十二章 腐敗性齒髓炎	七〇
原因    症候    療法	

第二十三章 齒髓結石	七一
原因    症候    療法	
第二十四章 齒髓實性充血	七二
原因    症候    療法	
第二十五章 齒髓虛性充血	七三
原因    症候    療法	
第二十六章 齒髓乾性壞疽	七四
原因    症候    療法	
第二十七章 齒髓濕性壞疽	七五
原因    症候    療法	
第二十八章 齒牙腫	七六
原因    症候    療法	
第二十九章 根側槽膿瘍	七七



原因  症候  療法	
第三十章 急性齒槽膿瘍	七八
原因  症候  療法	
第三十一章 慢性齒槽膿瘍	八一
原因  症候  療法  血清療法  最新藥療法	
第三十二章 外傷性齒根膜炎	八五
原因  症候  療法	
第三十三章 急性單純性齒根膜炎	八六
原因  症候  療法	
第三十四章 慢性單純性齒根膜炎	八七
原因  症候  療法	
第三十五章 腐敗性齒根膜炎	八九
原因  症候  療法	

第三十六章 漿液性齒根膜炎	八九
原因  症候  療法	
第三十七章 齒齦肥大	九〇
原因  症候  療法	
第三十八章 齒齦炎	九一
原因  症候  療法	
第三十九章 口內炎	九三
原因  豫防法  療法	
第四十章 口中ノ惡臭	九六
原因  療法	
第四十一章 鵝口瘡	九八
原因  症候  療法	
第四十二章 舌炎	一〇〇



原因 II 症候 II 療法  
 第四十三章 舌癌…………… 101  
 症候 II 療法

目次終

續家庭醫學叢書 第二編 齒と口腔病の話

齒科醫學士 五味芳春口述

第一章 齒の解剖と生理

齒の状態

人間の齒は普通上下三十二個で、生涯の中二度發生する、最初に生えるのが乳齒で、生後六七ヶ月より生え初め、六七歳頃になると、今度は永久齒に代るものである。即ち齒の數は小兒の時代一名乳齒時代には二十枚、永久齒時代になると三十二枚の齒を持つて居るのが普通であるけれども、中には二十八枚より無い人もある。



齒の分類

此の人間の齒を専門的に分けて見ると、前の方にある扁平の齒四枚は門齒と云ふ、これは物を噛み切る爲めの齒である。其の兩隣りに犬齒と云ふて俗に之を糸切齒と云ふ、また其の次にある奥齒に似て少し形の小さいのは小臼齒と云ふて、これは兩側に二枚づつある。奥齒は白のやうな形状と官能とを持つて居るから臼齒と云ふて居るのであるが、其の奥齒に對して小さいから小臼齒と云ふのである。奥齒即ち大白齒は、左右に二枚づつあり、最後に智齒と稱するのが一枚づつある、此等の齒は上下合して三十二枚あるわけになる。尤も小兒には、前齒の門齒が四枚と、犬齒二枚は大人の齒の通りであるが、小臼齒と智齒は無くて、大白齒が二枚づつあるから、都合二十枚となるのである。

齒の解剖

齒の素質中、外部に現れて、眞珠色をなせる部分は琺瑯質と云うて、人間の身體中一番に硬いところである、其の下は象牙質と云うて、白色或は黄白色の硬い組織から成り立つて居り、また其の中には齒髓と云うて、丁度高野豆腐に似たやうなものがあるが、此の中には澤山の血管や神經があつて、骨の中の血管や神經と連絡を保つて居るものである。

齒の發生と、其の交換とは人によつて多少の遲速がある。左に示すは今田氏の調製せる表である。

齒牙發生概表

第	期	發生月	乳	齒	發生期年	永	久	齒
		二			三			

齒の發生



期四第	期三第	期二第	期一第
二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	五 四 三 二
齒牙	第一小白齒	第一門齒 第二門齒	顎骨中ノ發育時
二 一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	七 六 五 四
第三大白齒	第二小白齒 第二大白齒	第一門齒 第二門齒 第一小白齒 大齒	乳齒使用時 第一大白齒

期五第
二 一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一
第二小白齒
二 一 十 九 八 七 六 五 四 三

即ち此の表によれば、先づ乳齒發生の末期を二十五ヶ月と假定し、永久齒は二十七年と見做すのである。そして乳齒の初發より終發に至る月數を一列に記載し、其の五ヶ月を各一期として、五期に分つのである。

第一期の五ヶ月は、各乳齒が顎骨中に於て生營を營むの時期である。

第二期の五ヶ月間即ち六ヶ月より十ヶ月迄は、第一第二門齒の發生時である。

第三期の五ヶ月間即ち十一ヶ月より十五ヶ月迄は第一乳白齒の發生時である。



ある。

第四期の五ヶ月間、即ち十六ヶ月目より二十ヶ月は歯牙の發生時である。  
第五期の五ヶ月間即ち二十一ヶ月より二十五ヶ月は、第二乳臼齒の發生時であつて、乳齒の發生期である。

また此の表によつて永久生の發生を知るには、乳齒の全五期即ち一ヶ月—二十五ヶ月の下に乳齒完成期即ち二ヶ年の次年即ち三年より二十七年までを列記すれば、永久齒の發生も亦五期に分つことが出来る。

第一期の五ヶ年は、乳齒使用の時期であつて、七年の終りに於て、永久齒第一大臼齒先づ發する、或はこれを名づけて學齡齒と云ふのである。  
第二期に於ては、乳齒發生の順序の如く、第一切齒、第二切齒、第一小

臼齒及び犬齒の四個を發生して乳齒と交換する。

第三期は、第二小臼齒及び第二大臼齒の發生期であつて乳齒と交換する  
第四及び第五期は第三大臼齒即ち智齒の發生期である。併し其の發生は甚だ不同であつて、十八年より三十年以上にて發生するものである。

一體に虛弱なる小兒にあつては、齒牙の發生が著しく遅れるばかりで無く、其の發生の順序も、上記の如く規則正しくは行かざることがあり、また往々不良の齒牙を有することがある。

齒は言語を調節することよ、容貌の美を保つ上に於て重大なる働きを爲すものであるが、其の主要なる働きは、食物を咀嚼することになる。即ち消化器の第一の關所たるところに立つて居つて、入らんとするものは何物



に限らず誰何して、其の物の硬い軟かいは勿論、熱い冷いも探り、そして胃に行つて差支ないものは送るが、硬い物や大きな物は一應噛み砕くの役目を持つて居るものである。だから咽頭を通らうとするものは假令石頭でも噛むと云ふのは歯の務めである。よく田舎の若い者等が、鬼胡桃の殻を歯で割るなど自慢をして居るが、これは元より其の筈で、歯は身體の諸器關中最も硬いもので、太古に於て、歯は一種の武器であつたのである。今でも子供は喧嘩するとよく噛み附く、獸は歯を最要なる武器として居るが、あれは其の證據であつて、實際歯の強いものは身體も強く、従つて氣も強いものである、尤も今日では人類には此等の方面には餘り多く用ゐられないで、食物の豫備消化として、食物を荒ごなしにすることに専ら使

齒は段々  
悪くなる

用せられて居るのである。

歯は斯くの如き大切なる働きをなすもの故また一名齡とも云うて、身體諸器關中重要なものよ一つであるが、世が開け行くに従つて、益々人の身體が弱くなつて行くと同時に、歯も益々悪くなつて來た。これに就ても深く研究したのは、ラーゼと云ふ人である、これはドレスデンの大工業家で、リングネルと云ふ人が金を出して、齒牙衛生試験所と云ふものを拵え、これへラーゼを聘して研究せしめたのであるが、研究の爲めに集つた材料は、實に二十二萬七百三十三人と云う多數であつた、と云ふので此の研究の結果によると、智齒と上顎の外側の門齒が退化して來たと云ふことが分つたのである。初め一千八百九十四年にラーゼ氏は、上顎の外側の門齒



10  
の發育が悪いものがよくあるのに氣が附いて、これは顔面骨が退化して門齒の育つ場所が狭められた爲めであらうと考へたが、其の後度々の研究を重ねて見る間に、顔の骨とは全く關係の無いことが明瞭になつて來た。即ち長顔の人も、圓顔の人も、角顔の人も共に門齒が退化して居る、亦中には門齒が退化して居るばかりで無く、二重に生えた人もある。然るに乳齒では普通の齒のやうに退化して居ない、反つて二重に生えることが多い、これは極昔の人間は野生生活をして居つた頃には、片側三本の門齒を有つて居つたのが、偶々今の時代にも現はれて來たものと思はれる。即ち古昔より退化して來たと云ふことが分る。此の門齒の退化と云ふことは他の動物には無いことで、唯類人猿に稀れに見るところであるが、これが人間

には一層著しくなつて來たものと見える、そして人類では女の方が男よりも著しく門齒が退化して居る、また同じ人類でも、北の方に住んで居る民族は其の退化が著しく、また野蠻人より文明人は著しき退化を認めると云ふことである。

以上は、齒の生理的自然に退化したのであるが、齒の病的退化に至つては實に驚くべきものがある。ラーゼ氏の調査によると、獨逸各地方の小學校生徒總數の七〇%から一〇〇%近く齒が悪く、またこれを齒の數から割り出すと、一人に就て平均二本半から十二本六分の病齒を有つて居る割合になつて居る。また獨逸各地の都布の小學校生徒に就ての取調べによれば、其の七七、四%から九九、七%は病氣のある齒を有つた兒童で、これ



を齒の數から云ふと、一人の兒女が平均二本六分から十本九分までの悪い齒を有つて居る割合になつて居ることである。

それから入齒の數から數へたところが、米國オハイオ州では、年々一億七十萬の齒が無く無ると云ふことであるが、實に驚くべき大數である。我が國に於ては實際どの位の齒病あるかは不明であるが、壯丁検査其他の検査の成績によると、百人中約八十人の齒病者があり、また學校の兒童には、殆んど齒の満足なものはないと云ふ有様であるが、此の齒の病と云ふのは其の多くは齲齒である。

齒は齡と云ふ位であるから、齒の悪いものに健康な人はある筈はない、胃腸病や神經衰弱等は齒の悪い爲めに能く起る病氣であつて、また學校

の兒童に就て調べた成績によつて見ても、第一齒の不良い兒童は、其の爲めに非常に身體の發育を害せられ第二、身體發育の不完全な兒童程注意力乏しく、第三、齒の不良い程、一般に作業の成績が良くないと云ふことである。要するに齒の善悪は、全身の健康と密接なる關係を持つて居るばかりで無く、兒童の齒の良否は、其の人の終生の健康に關係があるから、齒の衛生に就ては充分の注意を拂はねばならぬ。

## 第二章 齒の衛生

専門家が人の齒を見ると、大抵其の人の性質を知ることが出来るもので



ある、これは畢竟齒の良否は、體質の強弱、遺傳の如何によるものであるから、齒の良否即ち體質の良否と云ふ關係になるのである。尤も中には小兒の齒の發生時の注意の悪いため、其の齒の排列を悪くし、或は清潔法の届かぬ爲めに、立派に發育すべき齒を悪くして了ふことがあるから、よく注意せねばならぬ。

此の注意としては、己に子供の胎内に宿つたときからなすべきものである。即ち母は齒を強くするところの石灰分を多く含んで居る食物を攝るや、**●**なしいよく子供が産れたならば、常に口中を清潔になし己に齒が二三本生えたならば、布片に水を浸して一日二三回拭ひてやり、そして齒が生え揃つたときには揚技を使はせる等は一般の注意である。

乳齒は、其の構成上永久齒に比して繊弱であることは勿論、酸に對する抵抗も弱く、齒髓は比較的大きいものである、それに小兒は糖分を好むか**●**て齶蝕され易く、従つて齒髓の疾患を起すことも容易である、併し茲に都合の良いことは、乳齒は永久齒に比して其の知覺が非常に鋭敏であるから、小兒の齶齒は比較的早期に其の知覺疼痛によりて發見されるのである、此の時保護者に於てはそれに注意して手當を施すこと早ければ早い程好結果を得るのであるから、速に齒科醫に計かり適當の所置を受くべきである。そして交換期が来たならば、尙ほ一層の注意を拂ひて、其の拔去すべきはこれを適當の時期に於て拔去し、一生涯使用すべき永久齒の立派なる完成を圖らねばならぬ。併し乳齒は早晚生え代るものであるから、其の



治療の方針は永久歯に比して少して相違がある、即ち或る一定の期間内だけ保てば良いのであるから、歯髓の抽出等永久的の處置を採ることはなく成るべく一時的健康を保持するやうにするのである。

歯の生えることは自然的即ち生理的のものであるから、歯の發生により何等障礙の起るべき筈は無いが、由來小兒は少しのことの爲めにも全身的變動を起し易きものであるから、發牙時には往々にして食欲の減退、不眠症、體溫上昇、嘔吐、下痢等を起し、甚しきは氣管枝炎等を起すことがあるが、此等は何れも神經性に來るものであつて、時には神經系統の故障をも起し、輕き癲癇様の發作を起すものもある、また何等原因無くして大聲を突發するやうなこともある。また局處的の障礙としては口内炎を

起すことがあるが、これは多くは限局性に來るものであつて、其の萌出せんとする周囲の部分の粘膜炎が潮紅腫脹して疼痛を起すのである。此等は出牙に原因して來るものであるから、歯が萌出を終ると共に自然に治癒するものであるが、若し此の時に於て保護者が口内衛生の注意を怠るときは、局處的傳染を起して、單純なる口内炎は一轉して潰瘍性のものとなり、限局性のものは全部性のものとなり、既生の齒の周圍に迄も波及し、呼氣に惡臭を發し、唾液の分泌を増し、食欲は不振となり、體溫上昇し、延いて胃腸の障礙を來すに至るが、此等は單純なる口内衛生で防ぐことが出来るものである。即ち出牙時に於ける小兒にありては、其の保育者たる者充分なる注意を以て小兒の口内を常に清潔に保つこと、哺乳器、食器等



小兒の食物

を清潔にすること等である。口中を清潔に保つには五十倍の硼酸水をガーゼに浸し、指の先きに纏ひて時々口内を拭ふやうにすること、食器、哺乳器は硼酸水等にてよく洗滌するか、熱湯中に煮るかして消毒することが出来る。そして第一特異なる症状を呈することがある場合には、齒科醫に就き齒齦部の切開を施し出牙を容易ならしむる等の手當を受けねばならぬ。

それから既に齒が生え揃ふたならば、餘り軟かい物ばかり與へて居つてはならぬ、齒の生えると云ふことは、既に硬い物を食べさせてもよろしいと云ふ自然の暗示であるから、少しづつ硬い物を食べさせるがよろしい。軟かい物ばかり食べさせて居ると、充分に咀嚼するの必要が無いから、齒

が丈夫になるばかりで無く、齒に粘りが付き易いから、齦齒にも罹り易くなる日本では上流社會には齒の病氣が多く下流の社會に少く、概して都會の人は田舎の者より齒が悪いと云ふのは、種々の關係もあらうが、兎に角此の軟かい物を好んで食べると云ふのが大原因になつて居る、歐米でも堅い黒パンを食べて居る百性の齒は丈夫であるが、軟かい白パンを食べて居る人には齦齒が多いと云ふことであるから、兎に角餘り硬過ぎざる程度に於て相當の硬い物を與へなければならぬ。

さて永久齒が將さに發生せんとするときは、乳齒の齒根は茲に吸收作用を受けて遂に脱落するに至り、而して茲に永久齒が出來するのである。併し此時に當り、若しも乳齒が病氣に罹つて居るか、又は齒齦に疾患あると

永久齒の發生するときの注意



き、若しくは歯髓に膿瘍等ある場合には、其の吸収作用が妨害を受け、それが爲めに永久歯は正當の位置に生え出づることが出来ずして、茲に歯列の不正を來すことになるのである、即ち乳歯の疾患の爲めに永久歯の發生に異常を來すと云ふことになるのである。要するに乳歯時代は、人生の發育上最も大切な時期である。されば歯牙口腔の疾患の爲めに、營養に障害を來たし、全身の發達に支障を來す等のことなき様注意を要するのである、即ち乳歯は其の交換期迄完全に保たるとやう努むることが肝要である。

歯牙が完全に發生しても、毎年少くも一二回は、定期に必ず齒科醫の所へ行つて、齒の健康診断をして貰ひ、若し齲齒にでもなりかよつて居ると

ころがあつたならば、早速治療を受くるがよい、乳歯は生え代るからどうでも良いと云ふ人があるが、それは大きな間違である、乳歯が悪ければ其の後へ生える永久歯も良くないものであるから、終生健康なる齒を保たうとするならば、乳歯時代からの注意が大切であることは前述の通りであるけれども、これはなかく保護者の注意が行き渡らぬところであるから獨逸のニルンベルグ市では、已む得をす、齒科醫と市と協同して、小學兒童の齒科治療所を設けて、熱心に診断治療を始めたが、其の成績は頗る良く、年々一萬五千人位の兒童の齒を治療して居つたと云ふことであつた。

我が國でも少くとも都會の地だけでも之をやらせたいものである。

齒牙の衛生上最も注意すべきは、齒磨粉の選擇である、現時市中に賣つ



て居る齒磨粉の種類は、實に何百種と云つて殆んど數へ切れぬほどあるが、其の中には房州砂に色と香氣を附けた物が少くない、徳川時代から使はれて、今日でも尙ほ一部の社會に愛用されて居るものには房州砂に胡椒若しくは唐辛子の類を混じたものがあつた。尤も今日新しく出來たものには、まさかそれほど甚しいものもあるまいが、大抵カルシウム鹽類と澱粉とが主成分になつて、これに色と香氣を附けたものが多いやうであるがこんなものを使つて居つたならば、忽ち齒の琺瑯質を磨滅して了つて、齒の爲めに惡ひのは云ふ迄も無いことである。また同じ同一種の齒磨粉でも極めて精製したものと、粗造なものとあつて假令同じ品だからと云つて必ずしも内容が同一ではない、顯微鏡で見ると、よく此等の有様が分る。

齒を白く  
する水

甚しく結晶が不定なものと、比較的結晶の乏しいものとあるから、市場販賣の齒磨粉の選擇には最も注意を要する次第である。尤も近來は大分良いものが發賣されて居るから、良好なるものを選んで用ひさへすれば差支が無い。

綠日などで、齒の綺麗になる水を賣つて居る、これは成る程綺麗になるには相違が無いが、此の薬は稀鹽酸と云うて、齒の琺瑯質を損ふものであるから、こんなものは決して使つてはならぬ。總て酸味の強いものは、齒の害になるものである。

齒磨に用ゐるものは、さう材料の高いものは無いから、然るべき人より處方を貰ふて、自分で拵えて使ふのは衛生と經濟とに適する、それで参考

優良なる  
齒磨の製  
法



の爲めに、岡山醫專の教授齋藤ドクトルの處方を左に掲げよう(編者)

一體齒磨料には、通常齒磨粉、練齒磨、齒磨石鹼の三種あるが、此等のものと材料は、主として炭酸石灰及び炭酸マグネシヤであつて、此等のものを極細末にして用ゐると、斑瑯質を犯すこと最も少く、また食物残渣の分解によつて生じたる酸を中和するの利があるけれども、粗製齒磨粉の中にある輕石末、諸種の灰分、炭末等は、齒質を損することが著して、それ  
に炭末は齒齦粘膜に侵入して文身的の斑を生ずることがあり、灰分は強き  
亞爾加里を含有して居るから、齒齦を腐蝕すること大なるものである。  
齒磨粉の外観を美にするために紅等を以て軽く着色するはよろしいが、  
「アニリン」色素は禁物である。齒磨粉の處方は

▲烏賊骨粉 四、〇 「イリス」根末 五、〇 炭酸マグネシヤ 五、〇

薄荷油 五滴

右研和齒磨料

▲炭酸マグネシヤ 一〇、〇 沈降白亞 三〇、〇 薔薇油 五滴 紅  
少量

右研和齒磨料

▲沈降炭酸石灰 三〇、〇 樟腦 三、〇 薄荷油 五滴

右研和齒磨料

▲ザロール 二、〇 沈降白亞 一〇、〇 規那及末 一〇、〇 薄荷油  
五滴

右研和齒磨料



練齒磨

練齒磨は、前述の齒磨粉を、「グリセリン」單舎、蜜等を以て練り合せ、粘土狀の稠度を保たしめたるものである。

▲炭酸石灰 二〇、〇    カルミン 〇、二    薄荷油 〇、五    單舎利別 五、〇

右研和練齒磨料

▲炭酸石灰 八、〇    カルミン 〇、二    薄荷油 〇、五    グリセリン 適宜

右研和練磨料

齒磨石鹼は、前記齒磨粉材料と、中性石鹼とを研和して製したるものである、故に其の反應は必ずや中性乃至弱亞爾加里性でなければならぬ。練齒磨及び齒磨石鹼中には、製造上酸及び油汁を混じ易いからして、大に注意

齒磨石鹼

を拂はなければならぬ。

▲炭酸マグネシヤ 五、〇    イリス根末 五、〇    藥用石鹼 五、〇    アラビヤゴム漿 適宜

右混和、塊となし齒磨石鹼料

▲藥用石鹼 一〇、〇    カルミン 〇、一を    酒精 八、〇に溶解す    沒藥 〇、五    薄荷油 一、〇    沈降炭酸石灰 二〇、〇    グリセリン 適宜

右齒磨石鹼料

▲炭酸苦土 五〇、〇    沈降炭酸石灰 一〇〇、〇    樟腦 一、五    藥用石鹼 一五、〇    鹽剝 五、〇    薄荷油 十滴    規那末 五、〇

右齒磨石鹼料



齒磨揚子の  
運び方

齒磨揚子の種類は、實に夥しきものであるが、此等の齒磨揚子中、毛部の彎曲せるものは、其の大部分が齒列弓に接着するからして、直線のものよりも宜しく、毛束の不同長に切られたものは、能く齒間に進入するからして、同長に切られたものよりもよろしい、また毛部の廣きものは、同時に齒齦をも刷掃するからして、狭きものよりも宜しく、それに健康なる齒牙に於ては、毛の硬きものは軟かきものよりもよい、これ硬毛のものは、能く齒間に進入すると、且つ齒齦をして漸次堅く且つ抵抗を強からしむるからである。けれども乳齒を有する小兒或は不健康なる齒牙を有するもの或はまた口内の疾病あるものは軟かい揚子の方が適するものである。齒磨揚子は購求後必ず消毒するが宜しく、毎使用後には充分乾燥せしめねばな

揚子の使  
ひ方

らぬ。また一定の保存器に入れることも必要の注意である。揚子の使ひ方は、決して横に擦るのではなく、上下に擦り、また前面ばかりで無く、其の後面をもよく磨き、尙ほ咀嚼面を清掃するも宜しいのである。人によつては齒齦から血が出て来る爲めに、揚子を使ふことが出来ないと云ふて、齒を磨かぬ人もあるけれども、これは齒を磨かぬ爲めに、俗に云ふ齒齦が満つて、それが口中の熱で酸化して齒齦を侵し、それが爲めに血が出るのであるから、斯様の人は無理に磨く習慣を附けなければならぬ。此の際特に食鹽で磨くと、出血を止めるものであつて、多少血が出ても構はず磨いて居ると、直ぐに此の癖が直つて、完全に揚子が使へるのである。



妻揚子と  
其の用ひ  
方

妻揚子は、齒間に嵌入せる食片を除去するに用ゆるもので、種々の材料より製作されて居るものである。妻揚子の骨質及び金屬より成れるものは太きときは齒間に入らず、細いものは折れ易く、且つ損傷を來すことがあるからして、絶體に此の目的に適しない。尤も「ニツケル」製のものはよろしい、木製のものは折れ易く、また「ソゲ」立つて、齒間に堅く嵌入して除るに困ることがある。それで最も適當なる材料は鯨鬚、鱧甲、羽扇等であつて、此等のものは柔軟にして彈力に爲み、抵抗強く、且つ容易に「ソゲ」立たざるから、細くするも比較的丈夫であつて、能く齒間に進入して其の目的を達するものである。我が國の妻揚子は、黒「モジ」或は櫛等より成るものである。黒「モジ」はよいが、櫛製のものは脆くして折れ易い許りで無

エロ  
ンと  
磨シ  
症

く、「ソゲ」立ち易いものである。若し齒牙が甚しく密に發生して、妻揚子を用ゐることが出來ぬときには、細く丈夫なる絹糸を弓狀に緊張して齒間に進入せしめて、目的を達することがある。妻揚子は必ず自己に適當するものを携帯するがよろしく、使用前には必ず消毒するを要するものである。小兒が齒の發生する時分、又生え變る時分に、重い病氣に罹つて、營養が不良となると、其れが爲めに齒の發育を妨けて「エローション」と云うて齒の面に凹みが出来て、其處から齒髓が出て來ることがあるから、病氣には特に營養に注意せねばならぬ。尙ほ序ながら同じ齒の凹みで、磨耗症と云ふものがある。それはどうしたものか西洋人に少くして、日本人や支那人に多い、よく金屬を以て齒の磨耗したのを填補したのを見受けるが、あ



歯牙の清潔

これは即ちこれである。尤も「エロージョン」と磨耗症とは別であつて、「エロ  
ーション」は病的、磨耗症は人為的なのであるから、其の豫防法としては  
煙草を吸ふに、金属の煙管を用ひて居つた人は、之をゴム製に換へるとか  
硬い揚子を使つて居つた人は、軟かい物に取り換へるといふ風にするよ  
ろしい。  
歯は常に清潔なるがよろしいのであるから、朝起きたならば、直ぐに含  
嗽して歯磨揚子を以て磨き、食後には妻揚子を以て、歯間の食物残片を取  
り、含嗽して不清潔物を去るやう注意せねばならぬ。尚ほ出来得るならば  
外出して帰宅せるとき、食事に向ふときには手指を洗ふと共に、口中を  
含嗽するやうにすれば更に妙である。

歯の攝生

それから歯は、一種の陶器のやうな性質を持つて居るものであるから、  
温度の急激の變化と云ふことは非常に害になる、例へば今まで温かい室内  
に居つたものが、急に寒冷な外氣に當ることや、熱い湯を飲んだ後で、急  
に寒冷な水で口嗽ぎをするとか等は宜しくない。またそれと同じ理由で、  
餘り冷いものや、熱い物を飲み食ひすると云ふことも宜しくない。酸の強  
い飲食物は總て歯の爲めに害になり、石灰分を多く含んで居る處の「ワカ  
メ」や昆布等は、歯の爲めになる食物である。

以上は、歯の衛生法の大要であるが、尚ほ出来得るならば、年に一二回  
専門の齒醫者にかよつて、歯の掃除をして貰ふと宜しい。食渣の附着たの  
は、一寸楊子を使つても除去することが、出来るが、歯石は唯楊子を使つ

齒石を除去せよ



たばかりでは、除くことは出来ぬものである。一體歯石と云ふものは、唾液中に含有する固形分が粘液のあるところに沈滞して生ずるものであるから、多血質の人にはどうしても歯石の附くことが多いわけである。

歯石にもいろいろの種類があるが、中にも緑歯石は、珪瑠質を侵蝕して来るものであるから、早く除去しなければならぬ。これは殊に上流の妙齡婦人に多く下流社會の婦人には餘り見受けぬところのものである。これはどういふわけであるかと云ふに、つまり營養過度の爲めに、唾液の分泌が多いのか、或はまた運動不足の爲めに、新陳代謝の作用が充分で無いのであらうと思ふ。緑歯石の初期には、齒齦の際に、黄色の粘液が附着して、それが漸次に緑黒の色になつて行くのであるから、其の緑色にならぬ間に

早く歯科醫の手當を受くるのが、肝要の注意である。

### 第三章 反 齒

反齒は日本人に多いと云はれて居るが、どうも遺憾ながら事實を認めなければならぬ。此の反齒になる原因を大別すれば、齒の生える前の原因と齒の生えた後の原因との二つになる。齒の生える迄の原因としては、生來の畸形である、兔唇即ち俗に云ふミツ口とか、口蓋破裂とか、顎骨の發育異常とか、口角が一方に引き釣られて居る人とか、出産の時に顎骨に受けた障害、若しくは小兒の體質的疾疇によつて營養の障害せられたときに、鼻腔若しくは氣道に疾疇があつて、口ばかりで呼吸するもの等である。



歯の生えた後に起る原因には、大體六つある。第一は、乳歯と永久歯との交代期に當つて、乳歯は齶歯であるか、或はまた何かの事情で永久歯の發生しない前に、乳歯が脱落してしまふと、其の跡に空隙を生じ、これが爲めに出歯や反歯となることがある、と云ふのは兒童は絶えず食物を咀嚼したり、或は談話等の際、上下の顎骨を動かすから、知らず識らず歯を咬み合せて右の空隙を兩側から壓迫して來て、遂には永久歯の發生すべき餘地を狭め、甚しきは全く之を塞ぐに至るものであるから、發生すべき空隙を失ひたる永久歯は、是非無く横側に反歯となつて出たり、前の方に押し出して亂抗歯や、出歯となるのである。

第二は前の場合とは全く反對に、乳歯が何時まで經つても交代せず、已に發生しつゝある永久歯を壓迫して其の發生を妨ぐる爲めに、永久歯は意外の所に齒頭を現はし來つて反歯となることもある。

第三は、技術の拙劣なる歯科醫の施術にて義歯を填充したり、或は金冠を被せなどして、上下歯の咬み合せを妨げたる場合、即ち人工的に他の歯を壓迫して反歯を拵へることがある。

第四は、何かの原因によつて、歯を失ふと、其の兩側の歯は平均を失ふて、一方の偏壓に堪へ得ないで、失ふたる歯の空隙に押し出して來る爲めに反歯となるものもある。

第五は、遺傳性のもので、此等は初めから正しき齒列の食合無く、従つて其の生え方も亂雜不規則にして横生えするのである。



第六は、悪癖の習慣、例へば頻りに指頭を咬へ、若しくは咬み、又は舌を上歯と下歯との間に挟み、或は舌を上下に捲き縮めたり、伸長したり、其の餘勢を以て口腔の内部から外方に、上下の歯根を壓迫し、又は下唇を引寄せ、口腔内部に深く弓形に曲け入れたりするなど、其の他種々なる悪習をなすもの等は些細のことであるが、長くやつて居る居る間には反歯の原因となるものである。

反歯の原因は何れとしても、それは多くの障害を人體に與へる、第一は容姿に關係すること多大である。如何に眉目清秀であつても、味噌歯や反歯があつては、トテモ美人の資格は無い。第二は咀嚼不完全の爲めに、胃腸を害すること多大である。第三は口腔の防備不充分的爲め、呼吸器を害す

る。第四には、音聲の美を害するは勿論、甚しきは發聲の自由をも缺くに至る。

次に此の反歯を豫防することが出来るかと云ふに、遺傳のものや其の他一二のものはどうも仕方が無いものであるが、大抵のものは注意によりて豫防することが出来る。假へば口より呼吸する小兒は、必ず鼻より呼吸する習慣を養はしむるがよろしく、若しどうしても鼻呼吸を營むことが出来ぬやうであつたならば、醫師に就て、鼻若しくは口中に病氣の有無を診て貰ひ、若し故障があらば其を除き、尙ほまた乳歯と永久歯と交代するときは、必ず歯科醫の診察を受けて、以上述べたる如き缺陷なからしめ、また齲齒の缺けたものは、其の儘に捨て置かず、必ず填充して貰ふがよろし



矯正の注意

い、斯く注意して、總て原因に揭けたる條項を除くやうにすれば、大抵は豫防し得るものである。要するに反歯や亂抗歯は、其の父母の不注意より起るものであつて、注意周到なる家庭に育つところの兒童には、決して反歯などあるべき筈のものではないの。

反歯は大抵は之を豫防することが出来るが、若し既に反歯となつたものであつたならば、これを矯正するの必要がある。整形手術の進歩せぬ時代にあつては、不正歯即ち反歯は、悉く抜き去り、義歯を以て填充て置いたものであるが、口腔外科の發達充分なる今日ではソナなことをせずとも、或る程度までは完全に矯正することが出来るのである。併し茲に注意を要することは、此の手術を施すには、年齢によりて其の成績の良不良、手術

矯正に適當なる年齢

の難易がある。然らば何歳位のときに之をしたならば最も適當であるかと云ふに、大凡乳歯の抜け交るのが七八歳から十三四歳までであるから、此の間にするのが最も良、此の手術は年が若ければ若いほど好成績をあげ得るのであるけれども、アマリ小さい間であると、恐怖がつたり、嫌厭がつたりして完全なる處置が出来ないから、先づ十二三歳より二十歳迄、殊に十五六歳を最も適當たる年齢として、此の時期を失しない内に熟練せる齒科醫の治療を受けなければならぬ。

併し茲に注意すべきは、數多くある齒科醫の中には、時としては齒の將來のことよりも、自己の收入に便なる治療法を施すものなしたも限らざるから、よく此の大切なる賢を託すべき醫師を選ばねばならぬ、即ち其の人



格、其の學歷、其の技能の如何を充分に取り調べて信頼すべき人を求むるがよい、殊に矯正手術などはあらゆる基礎醫學を土臺として審美學上の原理までも應用して施術するの要があるから、餘程手腕ある醫師を選ぶべきである。

それでは、反歯はどうすれば矯正されるかと云ふに、元より熟練なる齒科醫の手術に待たねばならぬが、大體の方法を述べると、大白歯は施術の基礎となるものであるからして、先づ大白歯が上下正當に咬み合ふや否やを檢し、若し正當に咬み合はざるときは、第一に之を正しくして次に之に隣接せる歯を順次に動かして矯正すべき齒の隣りに空隙を造り、其の空隙間に反歯若しくは出歯を矯め入れるのである。そして其の矯正したる歯は

其の固定を助くるが爲めに、小さきものを齒間に挿み置くこともある。要するに反歯も出歯も、成長後に於て發生するものであるから、父母たる人は、よく注意して、其の兒の尙ほ幼稚なる時代に於て矯正すると云ふことを忘れてはならぬのである。また矯正器を用ゐる方法がある。

#### 第四章 齶 齒

齶齒は誰も知る通り、齒に穴が出来て、そして痛む病氣であるが、これは口中にある細菌の爲め齒の腐蝕して行くものである。齒の腐つて行く其の初めは、齒の表面の咬み合ふ處の小さい溝が、齒の横の細い縦溝の所に黒い色がつき、其處へ小揚子か針のやうな細い物を押し込んで見ると内部



へ深く入る、さうして其の腐蝕の深くなるのが早い人と、遅い人とあつて  
早い人は僅かに二三月の間に奥深く蝕れるが、遅い人になると、十年位  
はかよふこともある。このやうに最初は珪瑯質を侵し、次には象牙質を侵  
蝕して、遂には歯髓にまでも侵して行くと、其處には神経があるのでシク  
く痛み出すのである。

又此の時期になると、歯髓が外氣其の他外物の刺戟を受けて、茲に歯髓  
炎を併發するかうなると、疼痛劇甚となり、殊に夜間身體が温まると、疼痛  
が増して来て眠られなくなる。又窩洞は時と共に益々大きくなり、歯髓は  
膿潰して惡臭を發するやうになる。窩洞擴大が益々進むと、遂には歯の冠  
頭の全部が消失して歯の根部だけ残る、そして疼痛の方は反つて無くなる。

原因

併しかうなると歯牙の役目は、なくなるのみか、尙ほ折に觸れて此の根が  
痛み出し、時には此の歯の根の周囲の齒齦又は歯の根管と云つて、神経の  
通つて居つた孔に疾病を起し、抜歯しなければならぬやうになるのである。

此の齦齒の起る原因は、主にも口腔内殊に齒間或は齒の咀嚼面に残つて  
居る食物が分解して乳酸を生じ、乳酸と細菌との作用によつて齒を腐蝕せ  
しむるのである。其の他には人種の関係もあつて、我が日本にあつては、  
四國、東北地方は概して齒牙善良に、九州、中國地方は割合に齒の悪い者  
が多い。

それからまた幼時の育て方も大に關係するもので、獸乳で育てられた子  
供は、母乳で育てられたものに較べると、三倍も多く死んで居るが、生き



残つたものも、母乳で育つたものよりは、齒の悪いものは、二十八プロセス程多いと云ふことである。

尙ほまた顔面顎骨の工合より、齒の病氣を起すものもある。統計によつて見るに、長顔の人は丸顔の人よりも齲齒に罹り易い、殊に極めて顔の長い人と、至つて顔の圓い人とを比べて見ると、其の長い方が殆んど二倍も多く齒を齲す。云ふことである。それはつまり顔が長ければ長い程、顎骨が狭いのが常であるから、従つて齒が互に押し合つて並び方が不揃になる傾きがある、そして其の隙間や凹凸の所に食物の渣が溜り易い、そればかりでなく、顔の長い人は、丸い人よりも咀嚼筋の力が弱いから、柔軟なものを多く用ゐるので、どうしても齲齒にかより易くなるのである。

其の他人種混合も原因となるので、例へば亞米利加の如き新開國民に齲齒の多いのは、此の人種混合の結果である。それから石灰分の少き土地に居住する人に多く、また文明は食物の調理法を進歩せしむるため、齒牙を用ひることが少い結果、齒を不良ならしむることになる。

其の他嗜好、~~等~~等もまた原因となり、過熱、過冷の飲食も害をなすし、職業にては燐工場又は鹽酸、硝酸、硫酸等の製造所に居る人、菓子屋、砂糖屋、米屋、粉屋等にも齲齒の多いもので、地方と都會とを比較すれば、都會の地の住民に多いが、要するに以上述べたる總てのものが、原因または誘因となつて齲齒を發生するに至るものである。

齲齒はなかく、多い病氣であるが、此の豫防法として、前に述べた齒の



療法

衛生法を守るがよろしく、殊に歯の清潔に注意するが大切であつて、毎食後、就床前等には、必ず口中も清潔にするがよろしい。

また既に歯の小孔の出来たものは、速かに歯科醫に就いて填充して貰ふと、齶歯の進行を停止して、永く其の歯を保つことが出来るけれども、若し炎症既に進んで根部に達せるものにあつては、最早之を抜き取るより外に策が無い。若し齶質缺损の少許なるものは、之を充填して繼續歯を施す法がよろしい。

齒科無痛療法

序ながら齒科無痛療法と云ふことに就いて一言しやうと思ふ。元來齒牙なるものと疾病は、非常なる疼痛の伴なふものであつて、例にも「齒の痛いほど痛いものはない」と云ふ位であるから、治療を加へる場合に於ても、

劇しい疼痛のあるべき筈であり、また何人も嘔ぞ痛たからうと思つて、根本的の治療を受けることに躊躇する傾きがあるが、現今の醫術は全く如何なる治療にても無痛に仕上ることが出来るのである。

齒科の治療に於て、患者の最も大なる疼痛を感すべきは、大白歯を抜く時、齒髓を抽出するとき、及び充填若くは金冠等を以て齒牙を補綴する場合にあつたり、腐蝕部を除去すると同時に、幾分の健康なる牙質をも削磨するのであるが、此等の手術は局處麻酔劑の力を借ることなくしては、殆んど其の痛苦に堪へ難く、完全に治療を終ることは大なる難事寧ろ不可能事であつたが、コカイン注射法の發明せられてから以來は、殆んど何等の痛苦をも與へず、且つ短時間、否寧ろ即時に無痛の間に此等の治療を施

痛を感ずる場合



法 局處麻酔

し終ることが出来るのである。尙ほ齒髓の抽出手術は、古くから亞砒酸を貼布して以て齒髓の知覺を失はしむることが行はれて居つたものであるが、此の法は比較的時日を要すると、齒根尖端組織を損傷せしむることあると、亞砒酸を貼布し置きて、其の儘事故の爲め治療を怠る等のことある場合に於て知らず識らず亞砒酸を嚥下し、中毒を受くることあるにより、コカインの即時使用に適し、且つ全く無障害なるには及ばざること遠しである。又これまでコカインの注射にては、直接麻酔せしめ得ざりし大臼齒の如きも、現今にては傳達麻酔法なる方法が發明せられて、神經叢に注射を施して、其の配下の神經を傳達的に麻酔せしむることが出来る様になつたのである。即ち現今にては齒科の治療を受くることは、何等の痛苦なきことと心得て大丈夫なりと云ふことに歸着したのである。

第五章 乳齒難生

乳齒の萌出機異常、或は齒齦の吸収に對する抵抗の大なるに原因するものである。

初め齒齦に不快の感じがあるので、小兒は之を慰せんとして、手指又は玩具を嚙むものである。そして漸次炎症を増し、疼痛が加はり、炎症は口腔粘膜全體に波及し、唾液の分泌は増加して口外に溢流し、絶えず口圍が濕潤する爲めに、濕疹或は表皮剝脱を生じて知覺過敏を來し、また全身症状としては、消化不良、食慾不振、下痢等の胃腸障礙を來すことがある。

原因 症候



療法

原因

若しまた神経系を犯すときには、数日前より不安の状を呈し、號泣して安静に睡眠せず、次で顔面潮紅、發熱、脈搏亢進等を來して、遂に四肢の搖蕩を起し、齒牙を緊咬し、眼瞼開放し、手指を緊握して、遂に假死の状態に陥ることがある。

豫防法として、硼酸水をガーゼに浸して、一日數回口内を清洗し、或は齒齦を切開して齒牙の萌出を容易ならしむ。其の他對症的療法を施すのである。

### 第六章 智齒難生

下顎智齒の萌出せんとして、被蓋齒齦の吸收伴はず、咀嚼時對合齒に衝

症候

突して發炎し、或は發生の方向を誤り、第二大臼齒に向つて萌出し、或は頰に向つて發生して、これに次ぐに細菌の侵入があるを云ふのである。

智齒齒齦の硬結、腫脹、潮紅を以て始まり咀嚼時僅かに疼痛を感じるのみであるが、追々炎症の進むに従つて膿瘍を形成し、頰部に腫脹し、疼痛は増劇するものである。また淋巴腺は早期より腫脹して、牙關緊急と化膿とは、著しく體力を衰弱せしめ、體溫昇騰、食慾不振、頭痛、不眠、便秘等を來すものである。

療法

初期の炎症にして、智齒の正位にあるときは、齒牙と齒齦との間を過酸化水素を以て洗滌し、「キャンフォフェニック」を注入し、沃度を「グリセロール」を塗布し、炎症の稍鎮靜したる後、上唇及び周圍の齒齦を「ノボ



カイン」或は「コカイン」注射の下に、刀及び鉗を以て切除し、有鉤鑷子を以て粘膜を舉止つと、充分歯牙を露出する迄齒齦を除去するがよい。

### 第七章 過剰歯

歯牙の過剰に形成せられたるに依るものである。

上前歯部に最も多く來り、大臼歯部はこれに次ぐものである、そして齒間に生ずることもあれば、或は齒列外に生ずることもある。多くは發育不充分であるが、稀れには正しき状態を有することがある。そして此のものゝ存在は齒列を不正ならしめ、齶齒の素因をなし、また唇舌の運動を妨げて發音の明晰を缺くものである。

原因  
症候

拔去して、他には矯正術を施すがよい。

### 第八章 屈曲齒

齒牙の化灰時に外壓を受けて、未石灰化軟部が變位せる爲めに起るものである。

多く齒頸部に於て屈曲し、冠部と根部とは方向を異にするものである。外觀及び咀嚼に障碍あるものは、切斷或は拔去して義齒を施すがよろしい。

療法

原因  
症候  
療法

### 第九章 磨耗症



原因 症候 療法

硬き食物の攝取、咬牙、義歯の金鉤、矯正装置の螺旋、或は對顎の齧性  
充填物に因る摩擦の持続に因て起るものである。

磨耗面は平坦なるか、或は扁平淺在の窩洞をなし、一般に寒熱に對して  
知覺過敏を呈するものである。

原因を除ぎ、純石炭酸、硝酸銀、三クロール醋酸、クロール亞鉛等を貼  
して知覺過敏を治するがよろしく、または窩洞を穿鑿して金充填を施すが  
よい。

### 第十章 畸形齒

齒牙に對する營養の變調によつて起るものである。

原因 症候 療法

前齒に於て、齒冠の著しく巨大なるを見ることがある、けれども齒根  
は比較的短小である。また圓錐形を呈するものもある。白齒に於ては咬頭  
及び溝の不正を來し、過剰の咬頭を見ることがあり、智齒に於て最も多き  
ものである。

外觀醜惡なるものは、切斷して繼續齒を施すがよい。

### 第十一章 癒合齒

先天性には齒牙の一部又は全部が癒合したるまよ化灰せるにより、後天  
性には慢性齒膜炎の結果として、白堊質が肥大して齒槽壁を破り、隣齒と  
癒合したるに因る。



症候

療法

原因

症候

先天性癒合には種々ある、即ち齒冠のみ連合し、或は齒齦のみ連合せるものもあれば、また全部に於て連合せるものもある、そして其の癒合は表面層のみのみあれば、象牙質をも連合し、或は髓腔の連合するものもあるが、後天性は唯根部に於て白堊質のみ連合す。

外觀醜惡なるときは、切斷または抜去して義齒を施すがよろしい。

### 第十二章 齒垢

食片及び唾液成分の沈着により、多數の細菌がこれに蕃殖するものであつて、口腔の清淨を怠る人に多いものである。

齒頸部に堆積し、白色稍黄色を帯び、甚だ柔軟にして、惡臭を放つもの

ので、これが醗酵すれば齲齒を生じ易き傾向となるものである。

常に口腔を清潔にして沈着を防ぐがよろしく、また沈着せるものは、齒刷牙を以てよく齒を磨けば除れるものである。

### 第十三章 齒石

唾液中に溶存する炭酸石灰や磷酸石灰の沈澱する際に、食片、上皮片等の有機成分を伴ふて齒牙に膠着するによつて生ずるものである。

齒石は、何人の齒にも多少は沈着するものであるが、殊に掃除不完全の人に多い、即ち唾液排泄管に對する齒牙、上顎大臼齒頰面、下顎前齒舌面に厚き淡黄色乃至暗褐色の層を爲すもので、其の硬度はいろいろである。

症候

原因

療法



療法

原因

此のものは歯牙の外観を損ずるばかりで無く、口中を不潔にし、呼気に悪臭を帯ばしめ、また唾液を變改し、尙ほ軟組織を刺戟して、齒齦炎及び齒槽膿漏等を發生せしむるに至り、甚しきは齒齦及び齒槽の吸収を來すことがある。

齒科醫に就て其の除去を計るより外に方法が無い、尙ほ平素善良なる齒磨粉を用ひて、完全に齒の掃除をなすは豫防となるものである。

### 第十四章 齒牙折傷

齒牙の打撲、衝突其他直接に齒牙に加はる暴力により、また間接には顎骨を媒間體としての打撲、顛倒等により上下顎の相衝突するによつて起

症候

療法

る。また劇寒及び劇熱は珪瑠質に罅隙を生ずるものである。

折傷なれば珪瑠質の破壊に止まるも、大なる臼齒にあつては、咬頭の接合部に於て、斜或は縦に分裂して齒根に達することがある。前齒にあつては斜または横折して齒根にまで波及することがある。そして何れの折傷にあつても疼痛を覺え、冷熱及び酸味によつて刺戟せられ、折傷若し大にして齒髓の露出するときは、急性齒髓炎を發して、劇痛堪え難きものである。

齒質の缺損僅に齒冠の一小部に止まるときは、充填によりて之を補綴するがよろしく、また齒冠の大部分を失ひ、齒髓を露出せるものにあつては壓迫麻醉によつて齒髓を除き、治療を施したる後繼續齒を施すがよい。ま



た歯牙の脱落せるものにあつては再植する等である。

### 第十五章 齒冠吸收

原因 症候 療法

齒牙の表面が膿汁に浴するときは、其の膿の爲めに齒冠表面の一部は脱灰溶解するに至るものである。また齒牙萌生機が障害せらるれば、周圍に破骨細胞が現れて齒冠を吸収し、表面に吸収窩を生ずるに至るものである。齒冠に不正形の凹陷として顯はれ、暗褐色乃至黒色を呈して齲蝕に似て居るものである。

充填を施すがよろしい。

### 第十六章 先天性齒牙缺如

原因 症候 療法

齒牙發育時に於ける營養障害、外傷、疾病等が原因となるものである。第三大臼齒即ち智齒の缺如は、常に見るところであるが、また他の部位にも之を見ることがある。

外觀 上または發音等に障礙あるものは、缺如部に義齒を施して之を補ふがよろしい。

### 第十七章 外傷性齒髓炎

原因

齲蝕に硬固物を刺入し、治療時に「エキスメベーター」、「エンジン」、ホイ



症候

「ント」等を以て歯質を穿通するか、或は歯冠の折傷に因て歯髓を毀傷するに因るものである。

歯冠は一部或は大部缺損して、歯髓は一髓角を露出するか、或は髓腔部を広く露出し、其の毀傷によつて出血し、疼痛は劇甚にして暫時の後、稍緩解するも、刺戟の加はる度毎に増劇するものである。

滅菌食鹽水或に過酸化水素を以て洗滌し、靜かに乾燥せしめ、丁香油或はコカイン等を以て疼痛を緩解せしめ、「ヨードル」を撒布して假封し、瘢痕形成後覆罩するのである。

### 第十八章 單純性急性齒髓炎

原因

牙質が缺損し、齒髓が露出して居るところへ、直接或は間接に刺戟が加はつて起るものである。即ち食片、器械、冷空氣、冷熱の飲食物の攝取、或は口腔液其の他の刺戟性物質は皆刺戟となるものである。

俗に齒痛と稱するは即ち本症である。疼痛は始め間缺性であつて、刺戟の加はる時にのみ發するだけであるが、追々には自然に發痛するに至り、發作の休む時間が少くなつて、疼痛は殆んど持續性となるものである。それにまた夜間就眠に當つて、疼痛は殊に劇甚となるもので、遂には齒髓が壞死し、腐敗或は變性に陥るものである。

軟化牙質を除き、重碳酸曹達水を以て窩洞を中和し、二%クレゾール水或は一%チノゾール水を以て窩洞を消毒したる後、緩和なる熱氣を以て乾

療法

症候



燥し、石炭酸、丁香油、「オエゲール」、「メントクレゾール」、「チモール」  
ロールフェノール、「カンフル」、酒精液等の何れかを貼して「ストツヒン  
グ」を以て假封して鎮痛せしむるのである。そして炎症が硝退したならば  
無刺戟性の物質を以て窩洞を充填するがよろしく、炎症去りたる後に眞の  
填充を行ふのである。若しまた疼痛久しきに亘つて止まざるときは失活し  
て髓質を抽きたる後に填充するのである。

### 第十九章 單純性慢性齒髓炎

原因  
多くは單純性急性齒髓炎よりして轉移して本症となるものであるが、ま  
た中には初めから慢性の輕過を以て來るものもある。リウマチス、水銀中

### 症候

毒等ある人は本症を來し易く、また化灰の不完全なる齒牙に於て屢々本症  
を見るものである。  
疼痛は急性症の如く劇しくは無く鈍痛である。平常不快感があつて、高  
度の冷熱なる飲食物または硬固なる食片の壓入によつて疼痛を發し、また  
運動、亢奮、入浴後或はまた急劇なる氣候の變化によつて發痛し、また寒  
胃の際には、持續的の疼痛を感じるものである。  
失活法を施して、齒髓を抽出するがよろしい。

### 第二十章 象牙質知覺過敏症

### 原因

外傷、齶齒、其他齒質の缺損による白堊質露出は、象牙質の知覺を過



症候

敏ならしむるものである。

外傷によつて歯牙が破折して象牙質が露出すれば、冷熱及び器械的刺戟に感じ、また攝食、呼吸等の爲めに疼痛を覺ゆるものである。また齶齒が象牙質を侵せば、飲食物または含嗽等によつて接觸及び冷熱の爲めに鋭痛を感ずるものである。その他何れの原因より來るものにあつても過敏を呈するが特徴である。

療法

防濕法を行ひ、アルコール等を用ひて乾燥したる後、丁香油、薄荷油、「キャンフォエニック」等を貼し、「ストツヒング」を以て假封するのである。そして後に至り電氣透藥法或は壓迫麻醉法等によりて知覺を鈍麻せしめ、金充填を施すのである。

### 第二十一章 慢性化膿性齒髓炎

原因

急性症より轉歸するものである。

二種の形態を以て顯る。即ち一は齒髓潰瘍であつて、一は齒髓膿瘍である。潰瘍は其の露出面が膿性分泌物を以て被はれ、屢々血液を混じ、腐敗性悪臭を放つ、疼痛は輕痛鈍重であつて、屢々反射性である。

症候

膿瘍は、器械を以て牙質を穿刺すれば少量の膿を漏らすものであつて、疼痛は平常輕微にして鈍重なるも、時として劇痛を發することがある。併し此の疼痛は穿刺して排膿すれば止まるものである。冷水の接觸は疼痛を輕減し、熱に逢へば劇痛を誘起するのが特徴である。



療法

髓腔を開放して膿を排出し、過酸化水素を以て洗滌して清潔となし、「キヤンフォフェニック」、「クロールフェノール」等を貼し、後ち亜砒酸を以て失活し歯髓を抽出するのである。

### 第二十二章 腐敗性歯髓炎

原因

口腔内に存在する多数の細菌は、歯髓の露出せる場合は申すまでも無く時には健康なる牙質の薄層を通過して、歯髓に達するもので、殊に少年の歯牙は入り易い、そして細菌は其の繁殖するに従ひ毒素を産出し、或は腐敗産物によつて刺戟を與ふるのが即ち本症の成因である。

症候

年少者の第一臼歯に最も多く現はるゝものである、即ち自然に疼痛を發

療法

して速に消散するも、また忽ち再發するものであつて、此の疼痛は器械的または冷熱の刺戟によつて發するものである。  
充分窩洞を清潔ならしめ、五%「フォルマリン」水或は「クロールフェノール」を十分乃至十五分間貼布して後ち丁香油、「クレゾール」を貼して假封し、歯髓が健康に復したる後、充填を行ふのである。

### 第二十三章 歯髓結石

原因

歯牙の硬組織が缺損し、これに刺戟が加はる爲めに生ずるものであるがまた健全歯にも見ることがある。

症候

時として反射的疼痛を發して、其の原因を探求するに苦しむやうなこ



療法

原因

症候

のあるのは、大抵本症である。またこれが爲めに多く齶齒を發生するものである。

失活して齒髓を除くがよい、此の際先づ結石を除去するは必要の注意である。

### 第二十四章 齒髓實性充血

齶齒、侵蝕症、外傷、磨耗症等によつて、齒纖維を露出せるところへ變性唾液、過冷過熱の飲食物、異常酸酵等によつて刺戟されて起るものである。

含嗽、飲食物の攝取殊に冷熱または甘酸物に逢ふて輕微の疼痛を覺え、

また運動、飲酒、入浴等によつて血液の循環を盛んならしむるも微痛を發するものである。

先づ防濕法を施して窩洞を乾燥し、軟化牙質を剔刮したる後、「キヤンフオフェニック」または鹽酸コカイン等を貼し、「ストッピンダ」を以て封塞し一二日間放置して異常が無ければ、不導性物質を窩底に布き、其の上に充填を施すのである。

### 第二十五章 齒髓虛性充血

動脈充血、結石等によつて、靜脈の壓迫せられて、齒髓は鬱血するに因りて起り、また全身的に寒胃、熱性病、心臟病、「リウマチス」、水銀中毒等に



症候

療法

原因

よつても来るものである。

疼痛は變性充血性の疼痛よりも連続するものであつて、格別刺戟無くとも起るものである。疼痛は鈍重であつて、數時間持續し、鎮痛劑を用ゐるも奏効すること遅きものである。

齒齦に沃度丁幾を塗布して血行の恢復を計り、同時に丁香油、薄荷油、「キヤンフオフェニック」等の鎮痛劑を貼するがよい。

### 第二十六章 齒髓乾性壞疽

齒髓の密封せられたる齒牙に來り、深在齶齒の充填後、化學的或は冷熱的に刺戟によつて徐々に壞死せるものが、暴力によつて、齒髓の根端部よ

症候

療法

原因

り斷絶して壞疽に陥るものである。

多くは打撲の既往症を有し、或は金屬充填を認め、齒痛其の他の症候を有することなく、齒牙は透映の度を減じ、多少暗色を呈するのみにて、格別の症候を呈せざるものである。

窩洞を完全に防濕消毒し、髓腔を開擴して齒髓を抽出するがよい。

### 第二十七章 齒髓濕性壞疽

乾性壞疽と同じ原因で來るものである。

殆んど乾性壞疽と同様である。唯齒牙の變色が顯著であつて、暗灰色乃至暗綠色となり、齒髓は軟化し、或は液化して灰白色乃至暗灰色、暗黒色



療法

原因

症候

若しくは暗緑色の泥状物質に變ずるものである。  
乾燥性壞疽の如く、窩洞を開放して、齒髓を抽出するのである。

六

### 第二十八章 齒牙腫

齒牙の芽胞或は發育中の齒牙より生ずるものであつて、これに軟性齒牙腫と、硬性齒牙腫とある。

特有の症候は無いが、壓迫によつて劇しき神經痛を起すことがある、軟性齒牙腫は生齒期に發生して緩徐に増大するものである。また硬性齒牙腫は形成不全又は潜伏せる齒牙と關聯し、骨様硬度を有し、胡桃大に達することがある。

療法

局處麻醉の下に、口腔内より粘膜及び骨膜を切除し、或は齒槽突起の一部切除によつて、腫瘍を露出して之を摘出し、治癒後に顎骨缺损部を補綴するのである。

### 第二十九章 根側齒槽膿瘍

原因

主として齒槽膿漏に繼發し、四十歳以上の男子に多く發するところのものである。

症候

無疵の齒牙を侵すものであつて、空洞を見ることは少い。症候は根端膿瘍と同様なるものであつて、劇然なる深在性搏動痛を發し、齒齦の頰側或は舌側に限局性の腫脹を生じ、化膿して、膿は齒頸に沿ふて排出すること

七



療法

多きものである。  
齒頸部を過酸化水素を以て洗滌して汚物を去り「キヤンフオフェニツク」を注入し、温巻法を施し、齒齦に腫脹が顯るれば切開を施し、切開口より「キヤンフオフェニツク」數滴を注入し、齒齦には「ヨードグリセロール」を塗布するのでこれを數日間反復するのである。

犬

原因

齒髓の化膿に連續して來り、或は齒頸部より、或は血流によりて感染するものであつて、病原は化膿菌である。

症候

初め不快感、鈍痛等あり、漸次増劇して持續性搏動性劇痛となる。患齒

### 第三十章 急性齒槽膿瘍

は著しく動搖弛緩し、咀嚼不能となり、微力を以て齒牙に觸るゝも尙ほ劇痛を發するものである。次で膿は齒槽骨壁を穿通して、外部に局限せる顎骨膜の炎症を生じ、患齒根側に相當する齒齦に著しく潮紅腫脹して溫度亢昇し、輕微の壓もまた多大壓痛を發するに至る。また全身症狀として惡寒、戰慄を覺え、次で體溫昇騰して三十九度内外に達し、脈搏頻數となり、食欲不振多くは便秘を來し、頭痛、不眠、神經痛等を起すが、齒齦に流動性腫脹を生ずるときは稍緩解するものである。

齒膜に膿が蓄積すれば、根管開放せるときは髓腔より排膿し、周圍組織の破壊が少い、これを無癢膿瘍と云ふ。若し根管閉塞せるときは、組織中抵抗の最を弱き部分を選んで之を破壊し、瘻管を形成して膿を排泄するも



療法

ので、多くは當該齒根の側面に相當する齒齦に瘻孔を作るもので、之を齒齦瘻と稱するのである。また齒膜に沿ふて齒頸部より排膿することがある。初期には根管を開放し、内容物を掃去し、過酸化水素を以て清拭し、綿花を纏絡せる探針に「キヤンフオフェニツク」を侵して唧筒作用を行へば初めに根管より膿を出し、次に血液を洩らし、疼痛は緩解するに至る。また全身症に對しては「アンチピリン」「アスピリン」等を與ふ。

齒齦に波動を呈するに至れば、速かに膿瘍を最軟部に成るだけ大きな切開を施して排膿せしめ、「キヤンフオフェニツク」の數滴を注入し、其の部に沃度丁幾を塗布し、また防腐藥を以て屢々含嗽を行ひ、外頰部に氷器法を行ふ。かくして數日を経て瘻口全く消失するを待つて充填するのである。

△

第三十一章 慢性齒槽膿瘍

原因

急性齒槽膿瘍が充分に治癒せざるときには其の轉歸として慢性症となるものである。

症候

瘻孔の存すると否とによりて、これを二種に分つ。無瘻膿瘍は、膿汁が根管より排泄して、他に瘻孔を有せざるものである。また有瘻膿瘍は齒槽壁を穿通して、齒齦の頰部に瘻管があり、根端には膿囊を附し、血石の沈着、齒根の吸收等あることが多いものである。また齒牙は平常多少延長し、疼痛無きも打壓に對して僅かに反應するものである。また屢々連接して骨膜下に膿瘍の存することがあつて、硬結、腫脹し爲めに永く牙關緊急を伴

△



ふことがある。それから寒冒、過勞其の他の原因があるとか、また無癭膿瘍にあつては充填物、食片等を以て窩洞を閉塞すれば、齒齦或は頬部に腫脹を呈して急性膿瘍のやうな症状を呈することがある。

無癭膿症に對しては、髓腔を充分に開擴し、髓室及び根管を清掃して過酸化水素を以て全く泡起せざるに至るまで清洗し、「キヤンフオフェニック」「クロールフェノールカンファー」を根管に満し、綿花を纏絡せる探針を以て唧筒作用を行ひ、根管孔外に送り、次で藥液を飽和したる綿條を根管に綿球を髓室に入れて假塞し、二日毎に之を反復して根管に異臭無く乾燥するに至れば根管充填を施すのである。根管狭少ならざるときは「フォルモクレゾール」を根管に貼して速に効を奏するものである、また若し頑固

なるものにあつては、「ヨチオン」「ヨードグリセロール」を用ゐるがよい。

有癭膿瘍にあつては髓腔を開擴し、根管の消毒清掃を行ひ、次で根管通過法を行ふのである、即ち始め硼酸水を通過し、次に過酸化水素を以てし、後「キヤンフオフェニック」を用ゐるのである。また治療困難なるときには、「ヨードグリセロール」か沃度丁幾を用ひ、後ち根管を乾燥し、消毒藥を容れて密封するのであつて、之を反復して排膿全く止み、根管に臭氣なきに至れば充填するのである。また根端に異狀があつて、藥物的療法に効無き場合には齒根切除術或は再植術を施すがよい。

骨膜下膿瘍あるときには、成るべく口腔より切開を施して其の部を搔把し、「ヨードグリセロール」を注入するか、時にはまた拔齒せなければなら



血清療法

ぬこともある。

頬癭を有するものにあつては、速に拔牙して拔牙窩を洗滌し、「ヨードグ  
リセロール」を注入するがよい。

本症の如き、また慢性齒槽膿漏の如きは、中には其の経過甚しく長く  
して殆んど難治のものがある。かう云ふものに對して、近時血清療法が發  
明せられ、研究日尙ほ淺きに係らず相當の効果を擧げて居る。けれども血  
清療法は、人によつては副作用を起すことがあつて、未だ全く之を除去す  
ることが出來ぬのは遺憾である。

此の外最近此等慢性疾患に對し、藥物的療法として「ミオトニン」なる  
新藥の注射が發見せられた。此の藥品の効力は化膿菌の繁殖を撲滅し、新

最新藥療法

陳代謝機能を盛んならしむるものであつて、血清の如く副作用を伴はずし  
て奏効することは確かに認められて居る、これが廣く一般に應用するよに  
至つたならば、齒科治療上大なる便宜と云はなければならぬ。

第三十二章 外傷性齒根膜炎

治療器械によるもの、或は齒冠の衝突、打撲等による齒膜の毀傷によつ  
て起るものである。

外傷部は出血し、時間を経過せるものは血餅あるか、或は創面を顯は  
し、疼痛は外傷の程度によつて異なるものである。若しまた化膿菌が侵  
入すれば、化膿して潰瘍面を呈し、或は増殖して息肉を爲すものである

原因 症候



療法

出血を清拭し、血餅あるときは、過酸化水素にて清拭するのである。若しまた止血し難きときは、過酸化水素を小綿球に浸して貼し、後ち「フェノルソジック」を貼し、「デルマトール」等を撒布して瘻痕を結ばしめ、缺損部を蓋封して假充填を施すのである。

原因

歯髓炎の波及により、また歯髓一部の残存、硬固食物の攝取、繼續齒、適合不完全なる義齒、充填物の過剰による咬合の過高、打撲、槌打、齒間分離法の粗暴、根管充填機の逸出等は皆本症の原因となるものである。初めは齒根部に持續性の不快感あつて、患齒は少しく挺出し、且つ動搖

療法

するものである。そして冷却するか、または齒冠を壓迫することによつて稍輕快するも、追々に深在搏動性の鈍痛を生じ、咀嚼障礙せられ、刺戟に逢ふ毎に疼痛増劇するものである。

原因を除き、齒齦に沃度グリセロール、沃度丁幾等を塗布し、また含嗽劑を與へ冷罨法を施す等である。

### 第三十四章 慢性單純性齒根膜炎

原因

最も多く急性單純性齒根膜炎の轉歸として來るが、また咬合の過高、對向齒の喪失、咬齒、硬固食物の攝取、指頭を以て齒牙を動搖する惡癖、または揚子の濫用等によつて起り、また全身病殊に寒冒、痛風、熱性病、消



療法

化機病、水銀中毒、ヨード中毒等によつても來り、齒根尖端の吸収に因るものである。

著しき疼痛無きも、一種不快なる感覺或は弛緩の感があり、齒牙は齒槽窩より多少挺舉せられて延長す、咀嚼に當つて、多少の不快感乃至疼痛を起すものである、また繼發症候として、白堊質の肥大を起すことがある。先づ第一に其の原因を除かねばならぬ、即ち根管尖端の微細齒髓片は之を抽出し、咬合の過高は之を鑿刮研磨し、不良の習慣は之を禁止するである。その他沃度丁幾、「ヨードグリセロール」の塗布を行ひ、防腐性の含嗽劑を與へ、尙ほマツサーヂ、弱電流を通ずる等である。

原因

### 第三十五章 腐敗性齒根膜炎

齒髓壞疽殊に腐敗性壞疽の爲めに、其の腐敗産物の刺戟に由て起るものである。

症候

患齒は多少挺舉弛緩し、疼痛は限局性にして鈍痛であるが、熱き飲食物を攝るときは、劇痛を發することがある。

療法

速に髓腔を開放して、腐敗瓦斯を放出するがよい。

### 第三十六章 漿液性齒根膜炎

中毒性齒根膜炎の一形態として來り、或はまた化膿性齒根膜炎の治療後

原因



症候

療法

原因

に來るものである。

根管より多量の漿液性の液體を漏出するのが特徴である。併し疼痛も壓痛も無く、唯齒牙は動搖するを以て、多少の不安を來すものである。

中毒性のものは、綿花を挿入し假封すること數日、漿液分泌止みたる後根管を填充するがよろしい、其の他のものは收斂劑を用ひて分泌を制限せしむるものである。

### 第三十七章 齒齦肥大

慢性齒齦炎より本症を續發すること多く、其の他緩和なる刺戟は總て本症の原因となり、また月經時、妊娠時に一時性の肥大を來すことがある。

症候

療法

原因

齒齦は緩徐なる増殖をなし、或は數個の齒齦縁に互りて廣汎性増殖を來し、柔軟海綿様にして出血し易く、また齒頸との間に膿汁が滯溜し、または上面に潰瘍を形成することがある。自覺症としては疼痛があり、咀嚼の際に、兎もすれば出血を來すものである。

刺戟をなすところの齒牙、齒石、充填物等を除き、肥大組織を局處麻酔の下に切除するがよろしい。肥大軽度なるものは、六〇%アルコールを以て摩擦し、二〇%クローム酸にて腐蝕するがよい。

### 第三十八章 齒齦炎

齒石の堆積、異物の齒間介在、剛毛刷子及び小揚子の濫用、不適合の義



齒、齒牙難生、口腔不潔、飲酒、喫煙、熱性病等によつて起るが、また全身病の一症候として水銀中毒、鉛中毒、壞血病等に来るものである。齒齦は、固有の光澤を失つて瀾濁を呈し、潮紅浮腫を來して知覺は鋭敏となり、少しく之れに觸るよも出血するに至る。また齒齦は齒頸部より剝離して、其の間に分泌物を瀦溜するものもあれば、また潰瘍の散在することもある。唾液の分泌が増進し、口中は常に惡臭を放つに至るものである。

刺戟となるものを去り、齒石を除去し、過酸化水素を以て洗滌し、沃度丁幾の塗布または「アルコール」を以て齒齦を摩擦するがよろしく、潰瘍面は硝酸銀を以て腐蝕するか、または電氣燒灼を行ひ、防腐收斂性の含嗽劑を與ふるがよい。

### 第三十九章 口内炎

口内炎とは、口中のアレルものを云ふのである、それには急性と慢性とあり、急性症は口内が赤く腫れて痛み、分泌が多くなつて飲食に障害を來す、また食味が變つたり、口内に臭氣を發すること等がめる。慢性症は唯赤くなつて居るのもあれば、または痛みのあるものもある。そして急性症のものは治療よろしきを得れば、大抵二週間位で全治に至るものであるが、慢性症は數年の長きに達することがあり、哺乳兒にあつては、時としてこれが爲めに危険の状態を呈することがある。



原因

口内炎は、膈チフス、麻疹、「インフルエンザ」等の傳染病より起ることもあり。また、心臟病、肺病等の鬱血より、或は水銀中毒其の他の中毒より來ることあるも、普通最も起る原因は飲酒、喫煙の濫用、過冷過熱の飲食物、齶齒、義齒の刺戟、齒牙の發生、不潔なる哺乳器等である。

豫防法

以上の次第故、豫防法として齶齒ある人は之を填充せしめ、義齒は夜間取り去り置き、飲酒、喫煙其の他原因となるものを避け、殊に哺乳兒にありては哺乳前、母の乳嘴、哺乳器等を清潔ならしめ、哺乳後には口内を清潔ならしむるが良い、即ち保護者は爪を短く切り、清潔になしたる指先に「ガーゼ」を捲き、清水或は五十倍硼酸水を浸して口腔内を清拭してやり、また少し年長じたる兒童にあつては自ら含嗽なさしむるがよい。含嗽は初

療法

めの間はうまく行かぬものであるが、母親が側にあつて自ら含嗽をなし、其の水をブツと吹き出して、何處迄いつたなど競争すると、兒童は興味を以て競ふて含嗽するやうになるものである、また熱病等にて口中の乾燥するものには、五倍の硼酸「グリセリン」を塗附するがよい。  
重症の口内炎にあつては、無刺戟性の冷き流動食物のみを攝らしめ、局處療法としては左の含嗽料を以て口内を清潔にするがよい。

▲二%鹽素酸加里水 六〇〇、〇 薄荷油 一滴

右口腔洗滌料、每一時間含嗽、殊に食後には叮嚀に數度含嗽するを要す。

尚ほ五十倍硼酸水、三プロセント硼砂水等皆賞用するに足り、炎症劇しき所には二プロセント硼酸「グリセリン」を塗布し、口内の惡臭あるも



のには含嗽料として左の處方を與ふ。

▲醋酸礬土 五、〇 水 一〇〇、〇

右一食匙を「コップ」一杯の水に稀釋して含嗽料となす

慢性の口内炎には刺戟を避け、前記含嗽料を用ふるの外、局處療法として炎症ある場處

▲サリチル酸 一、〇 アルコール 一〇、〇 蒸餾水 一〇、〇

右口内塗布料

を塗布するがよい。また酒客の慢性口内炎にユーマイエル氏は、臨臥前に大黃の小片を咀嚼せしむるがよいと云ふて居るが、これもよからうと思ふ。

### 第四十章 口中の惡臭

原因

口の臭きには種々の原因がある、胃の悪い爲めに起るのもあれば、齶齒の爲めのもあり、また前の口内炎の爲めに起るものあれば、或はまた齒髓の壞疽になつたのに腐敗菌が入つて、其處に硫化水素や安母尼亞、炭酸「プトメイン」等の臭い有害瓦斯を發して、それが口中より外に發散する爲めに起るものもあるから、胃の悪い人は胃を癒し、齶齒はこれを填充し、齒髓の壞疽になつたのも同じくこれを填充するとよろしい。また一般に口中衛生として左の含嗽料の何れなかりを常用するとよろしい。

▲没藥丁幾 五、〇 ラヴェンデル精 九五、〇 サツカリン 一、〇

右洗滌原料となし、コップ一杯の水に一茶匙を混じて使用に供す

▲ザロール 六、〇 アルコール 一〇〇、〇

右洗滌原料、同法同上

療法



○ミユルレル氏「チモール」安息香水

▲チモール 〇、二五 安息香酸 三、〇 オイカリプス精 一五、〇

アルコール 二〇〇、〇 薄荷油 〇、七五

右洗滌原料、コップ一杯の水に點滴し著明の潤濁を生ずるに至るを度として使用に供す

前項口内炎の條下にある含嗽料もまた使用に供するに足るが、臭氣の強いものには

▲過満俺酸加里 一、〇 水 一〇〇、〇

▲右洗滌原料、コップ一杯の水に一茶匙を投じて含嗽料とす  
を使用するがよい。

### 第四十一章 鴛口瘡

症候

初生児の口の中にはやよともすると、鴛口瘡と云ふ白い苔が生ずるが、殊に最も多く舌の上に生ずるから、俗に白舌とも云ふ。素人は乳汁の滓など云ふて居るが、乳汁の滓もたまることあるにはあるが、乳汁の滓なれば布片の様なもので容易に拭き取れるけれども鴛口瘡はなかく、拭き取れるものではない。そして之れを等閑にして置くと、舌ばかりでなく、上顎、頬から咽喉まで一杯に出来て、遂には乳汁を完全に飲むことは出来なくなり、小児は非常に衰弱するものである。

口内に乳汁の滓が溜まると、それが分解して、これに鴛口瘡菌と云ふ一種の糸状微菌が發育して、斯様に白舌を生ずるのである。

乳汁を哺ませた度毎に、口内を能く拭ひて清潔にするやうに心掛けさへ

原因

療法



すれば、此の病を豫防することが出来る。口内を拭ふには硼砂か重曹を十倍に溶解したのが一番によい。それと同時に乳嘴をも拭へば尙ほ確かである。併し既に鷺口瘡が出来て了つてからは、三百倍の過満俺酸加里溶液で度々拭ひ取ると大抵は癒るものである。

### 第四十二章 舌 炎

舌の損傷、及び近傍の化膿炎症、義齒、齲齒の刺戟によつて之を發するものである。

發炎腫脹して疼痛を發し、攝食不充となり、時にはまた呼吸困難を發することもある。

原因

症候

療法

消炎劑を以て含嗽し、化膿せるものは危険なるを以て、切開して膿を排泄せしめねばならぬ。

### 第四十三章 舌 癌

四十年乃至六十年の人に發すること多く、初め舌縁及び舌尖に小結節或は潰瘍又は硬結、肥厚等となりて現れ、追々成長するに従つて深き腐敗性潰瘍となり、疼痛は劇烈にして耳内に放散し、甚しきは談話、食事さへも妨げられ、末期には他部の癌腫の如く全身衰弱の下に斃るものである。早く切除するがよい、ラヂウム、レントゲン線等も應用せらるるも全治は疑はしきものである。

症候

療法



續家庭醫學叢書  
第二編 齒と口腔病の話 終

101

不許複製

大正八年四月廿六日 大正八年五月一日	印刷 發行	定價金二十錢
編纂者	東京市小石川區宮下町十二番地 伊藤 尙賢	
發行者	東京市芝區二葉町九番地 野村 鈴助	
印刷者	東京市本所區番場町四番地 守岡 功	
印刷所	東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社	
發行所	東京市芝區二葉町九番地 新橋堂出版部	
發賣元	東京市京橋區出雲町一番地 新橋堂書籍雜誌小賣部	
	振替東京四三六四二、電銀五九一	







醫學博士 廣川和一郎先生述	◎淋病の話	定價金貳拾錢
佐藤昌祐先生述	◎梅毒の話	定價金貳拾錢
東洋肛門科院長 森直郷先生述	◎肛門病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 杉村 董先生述	◎ヒステリーの話	定價金貳拾錢
醫學博士 南 大曹先生述	◎胃腸病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 森 繁吉先生述	◎病人看護の話	定價金貳拾錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有益な食物と危険な食物の話 附喰合せの話	定價金貳拾錢
醫學士 中村 讓先生述	◎精神病の話	定價金貳拾錢

醫學士 菊池 林作先生述	◎脚氣ミリョーマチスの話	定價金貳拾錢
ドクトル 齊藤精一郎先生述	◎寄生蟲病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷上	定價金貳拾錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷下	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎感冒と肋膜炎の話	定價金貳拾錢
醫學博士 阿久津三郎先生述	◎男子生殖器病の話	定價金貳拾錢
醫學士 高橋 政秀先生述	◎妊娠と避妊の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 有道先生述	◎良薬と毒薬の話	定價金貳拾錢



醫學博士 杉本 東藏先生述	◎便秘と下痢の話	定價金貳拾錢
醫學博士 中原德太郎先生述	◎外科療法の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 繁吉先生述	◎注射の話	定價金貳拾錢
醫學士 井上 温先生述	◎眼病の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 有道先生述	◎呼吸器病の話	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎性慾教育の話	定價金貳拾錢
ドクトル 落合 惣三先生述	◎科學的美容法の話	定價金貳拾錢
醫學博士 額田 豐先生述	◎腎臟病と糖尿病の話	定價金貳拾錢

四

醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話上	定價金貳拾錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話中	定價金貳拾錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話下	定價金貳拾錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有効和漢藥療法の話	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎肺病有効療法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎化學的健康増進法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎物理的健康増進法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎滋養食物と滋養劑の詰	定價金貳拾錢

五



衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂
◎九種傳染病の話	◎癌の話	◎營養療法の話	◎生殖衛生の話	◎黴菌と消毒の話	◎婦人健康増進法の話	◎兒童健康増進法の話	◎精神的健康増進法の話
定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢

衛生新報社編纂	醫學博士 小川 三郎先生述	醫學博士 横手千之助先生述	□續家庭醫學叢書□		牙科醫學士 宮原立太郎先生述	牙科醫學士 五味 芳春先生述	醫學士 菊地 林作先生述	醫學士 菊地 林作先生述
◎理想的飲食物の話	◎心臓病の話	◎理學的療法の話	◎肺炎と其他の肺疾患 附流行性寒胃	◎齒と口腔病	◎胃潰瘍と胃癌	◎消化不良と其療法		
定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢		



近刊	◎花柳病の話	定價金貳拾錢
近刊	◎頭痛の話	定價金貳拾錢
近刊	◎生殖器障害	定價金貳拾錢
近刊	◎女子生殖器病	定價金貳拾錢
近刊	◎肝臓病と盲腸炎	定價金貳拾錢
近刊	◎氣管支カタルと喘息	定價金貳拾錢
□體力養成叢書□		
醫學博士 大澤謙三先生述	◎冷水浴と冷水摩擦	定價金參拾錢

醫學博士 二木謙二先生述	◎腹式呼吸	定價金參拾錢
醫學博士 栗本東明先生述	◎海水浴	定價金參拾錢
醫學博士 櫻田十次郎先生述	◎滋養物の攝取 <small>上卷 下卷</small>	各冊金參拾錢
醫學博士 遠山椿吉先生述	◎深呼吸	定價金參拾錢
衛生新報主筆 伊藤尙賢先生述	◎呼吸靜座法	定價金參拾錢
□健康法研究叢書□		
醫學士 森繁吉先生述	◎健腦法	定價金參拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎強肺法	定價金參拾錢



<small>ドクトル</small> <small>深瀬 恒太先生述</small> ◎胃腸健康法 <small>定價金參拾錢          郵税金四</small>	<small>ドクトル</small> <small>宮原立太郎先生述</small> ◎食養健康法 <small>定價金參拾錢          郵税金四</small>	<small>醫學博士</small> <small>菊地 林作先生述</small> ◎運動競技に依る健康法 <small>定價金參拾錢          郵税金四</small>	<small>醫學博士</small> <small>千葉 眞一先生述</small> □通俗治療養生法叢書□ ◎耳鼻咽喉病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>醫學博士</small> <small>額田 豐先生述</small> ◎肺結核治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>醫學博士</small> <small>岡村 龍彦先生述</small> ◎皮膚病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>醫學博士</small> <small>阿久津三郎先生述</small> ◎生殖器病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>
---	---	--	--	--	---	--

<small>醫學博士</small> <small>豐福 環先生述</small> ◎小兒病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>近</small> <small>刊</small> ◎神經衰弱治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>近</small> <small>刊</small> ◎花柳病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>近</small> <small>刊</small> ◎胃腸病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>近</small> <small>刊</small> ◎婦人病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>	<small>近</small> <small>刊</small> ◎通俗腦病治療養生法 <small>定價金參拾五錢          郵税金貳</small>
--	--	---	---	---	--

◎以上五冊既刊



□ 一般衛生書類 □

狩野病院長 狩野謙吾先生著	◎ 增補 訂正 神經衰弱豫防法	定價金六拾錢 郵税金六
狩野病院長 狩野謙吾先生著	◎ 神經衰弱自療法	定價金六拾錢 郵税金六
村井 弦齋先生著	◎ 著者 實驗 痔疾の根治療法	定價金六拾錢 郵税金八
伊藤 尙賢先生著	◎ 實驗 有効 民間療法	定價金八錢 郵税金八
醫學博士 瀨川 昌善先生述	◎ 病兒及虛弱兒の養育法	定價金八拾錢 郵税金八
醫學士 佐藤 得齋先生述	◎ 生殖より育兒迄	定價金八錢 郵税金八
各專門大家述	◎ 實驗 有効 賣藥療法	定價金五拾錢 郵税金四

附送養劑と滋養食物の話



8.5.28



新橋堂發行





60
571



終

